Japanese Journal of Applied Psychology
2012, Vol. 38, No. 2, 147–148

短　報

集団内における迷惑行為への対処
—部活動・サークル集団に所属する大学生を対象とした面接調査から—

尾関美喜[*1]・吉田俊和[*2]

Coping with Inconsiderate Behaviors in Groups: From Interview with University Students Who Belong to Varsity Clubs at University

Miki OZEKI[*1] and Toshikazu YOSHIDA[*2]

The aim of this study were to discuss reasons for judgment of inconsideration and coping behavior with inconsiderate behaviors. An interview was conducted on 7 university students who belonged to varsity clubs at universities. Result suggested that anxiety for matters brought by an inconsiderate behavior could be a criterion for a judgment of inconsideration and that attachment to in-group promoted coping behaviors with inconsiderate behaviors.

key words: inconsiderate behavior, organizational commitment

問題と目的

集団活動を行ううえで，集団の円滑な運営を妨げたり，集団内の人間関係を悪化させたりする原因となる行為が見られることがある。行為者にはその意図がなくても，認知者が迷惑だと感じていることもあるだろう。このような集団内における迷惑行為について，生起，認知過程が明らかにされてきた（尾関・吉田，2005, 2007）。しかし，迷惑認知の根拠や，迷惑を認知した際の対処行動，およびそれらの規定因はまだ明らかにされておらず，有効な対処策は見いだされていない。そこで本研究では，大学生の部活動・サークル集団内で迷惑行為が生起した場合に，迷惑だと認知した理由および対処行動を，組織コミットメントとの関連から検討する。

*1 早稲田大学人間科学学術院
Faculty of Human Science, Waseda University
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192, Japan.
*2 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

方　法

2007年9月に，部活動・サークルに所属する大学生7名（男性3名，女性4名）を対象として半構造化面接を行った。面接対象者は，同年5月〜7月にかけて，9団体を対象に実施した質問紙調査の中で面接調査への協力者を募集した際に協力を申し出た回答者であり，質問紙調査では組織コミットメント（高木・石田・益田，1997）に回答していた。なお，5名が体育会系団体，2名が文化系団体の成員で，これらの団体はすべて異なっている。面接は第一筆者と大学生1名のいずれかによって，対象者1名につき約30分間行われた。面接対象者は「1: 所属集団内でみんなが迷惑だと思っていることは何か」「2: その行為をどう思うか」「3: その行為を見たらどうしようと思うか」の三つの質問に回答し，面接担当者が面接中に用紙に記入した。

結果と考察

対象者の組織コミットメントについて，愛着的コミットメント（以下AC），存続的コミットメント（以下CC）の合計尺度得点が，それぞれ質問紙調査の回答者166名の平均値 (AC M=30.6; CC M=18.5) を基準として高群の場合はH，低群の場合はLとした。各対象者の属性と回答をTable 1に示した。

回答から，集団によって迷惑行為とされる行為が異なり，行為によって判断理由が異なることが示された。そして，迷惑行為の結果として生じることが予想される事態への懸念が迷惑認知の根拠であることが示された。質問紙調査による研究では（尾関・吉田，2005, 2007），判断理由が行為によって異なる点を明らかにすることができておらず，認知者が個々の迷惑行為の結果として予測する事態を扱うことが困難であった。それゆえにこれらの要因が迷惑認知の規定因であることを明らかにできなかったことを考えると，ここで得られた知見は非常に重要な視点を提示しているといえよう。

迷惑行為への対処行動については，特にACの低い成員は，行為を迷惑行為として認知しても，その生起を強く問題視してはいない面もあり，自ら積極的に対処しようとはしない傾向があることが示唆された。他方，ACの高い成員は，所属集団に主体的かつ積極的にかかわるからこそ迷惑行為を意識しやすく，積極的に迷惑行為を抑制することを志向する傾向があることが示唆された。これは，所属集団との心理的なつながりが強い成員ほど，迷惑を強く認知し（尾関・吉田，2007），集団に貢献しようとする (Ellemers, Doosje, & Spears, 2004) という先行研究の知見と一致する。以上を総合すると，所属集団へのかかわりの強さが，迷惑行為への対処行動の規定因の一つと考えられる。

Table 1　組織コミットメントと迷惑行為への対処行動

対象者	性別	学年	団体	AC	CC	1: 迷惑行為	2: 思うこと	3: 対処行動
1	男	3	体育会系	H	H	遅刻や忘れ物 OB や上級生への気遣い不足	基本的なことだから，厳しく言われて当然。	口で言えることは言う。ただ，自分は性格的には言わないほうなので，仲間の中でちょっと相談して，言う役割の人がびしっと言う。
2	男	2	文科系	L	H	目立つ問題はないが，意見の対立	活動への取り組みの積極性の差に起因するが，人によって考え方が違うので仕方ない。	とりあえず，ほっとく。あまりにひどかったら止める。自分がまとめなくてはならないときがくれば，やると思う。
3	男	1	体育会系	L	H	バイトを重視して練習しない先輩	この人が中心になったら不安だが，周りがフォローするだろうし，なんとかなると思う。	(行為者が) 仲のよい人なら，その人と話してみる。
4	女	3	体育会系	H	H	安全への配慮 仕事のミス 役職決めでの揉めごと	事故があってからでは遅い。 なんとかしてくれないと。	(役職上) 怒ったり，怒鳴ったりする。 悪いことは悪いと言わないと，どうしようもなくなる。 仲裁に入ることもある。
5	女	3	文科系	H	L	準備に参加しない 遅刻	後輩には伝えたくない。	上の学年とも話すようになった。 話し合いの結果や反省を Web 上に残した。
6	女	2	体育会系	H	H	ほとんどない	特に何も思わない。	今あることはたいしたことないので，特に何もしない。
7	女	2	体育会系	L	H	ほとんどない。ただ，一度だけ準備をすることになっている 1 年生が全員いなかったときに 2 年生が準備しなければならないにもかかわらず，自分たちが積極的に動かなかったことがあった。		同学年どうしで注意しあう。

引用文献

Ellemers, N., Doosje, B., & Spears, E. 2004 Sources of respect: the effects of being liked by ingroups and outgroups. *European Journal of Social Psychology*, **34**, 155–172.

尾関美喜・吉田俊和 2005 集団での上下関係規範と集団サイズが迷惑の認知に及ぼす影響　応用心理学研究, **31**, 1–11.

尾関美喜・吉田俊和 2007 集団内における迷惑行為の生起および認知―組織風土・集団アイデンティティによる検討―　実験社会心理学研究, **47**, 26–38.

高木浩人・石田正浩・益田　圭 1997 会社人間をめぐる要因構造　田尾雅夫(編)　会社人間の研究―組織コミットメントの理論と実際―　京都大学学術出版会 pp. 265–296.

(受稿: 2011.5.20; 受理: 2012.3.26)